第2章

先生方の記憶

シスター・アンジョリーナから学んだこと

'56～'63／担任・'72～'85／校長　シスター・ドメニカ　杉村美枝子先生

シスター・アンジョリーナ・バローネには九〇歳の御誕生日を迎えられたとのこと、心から御慶び申し上げます。

私はシスターと通算一二年をご一緒に過ごさせていただき、宣教、信仰、予防教育法についてその生（なま）の姿に接することができました。そして、そのとき学んだことは後日私が独り立ちしたときにも心の指針となって生き続けました。今、ここにその二、三の出来事を記させていただき感謝の意をあらわしたいと思います。

私が日黒星美学園小学校にはじめて赴任しましたのは昭和三〇年の春、シスターになって二年目の年でした。昭和二九年に開校した星美は当時一年生と二年生の二〇〇名余の児童と校長のシスター・アンジョリーナと四人のシスター、若い五人の先生方、そして二人の用務員さんだけの小さな学校でした。でも、英語のさかんな学校でした。児童たちにはアメリカから取り寄せた絵本形式のすばらしい教科書が準備され、校長さま自らが授業にのぞまれました。オール英語の授業！　ジェスチァたっぷりの教え方に児童たちは眼を輝かせ喜々とした授業風景でした。子どもたちに「好きな勉強は？」とたずねると、誰もがきまって「英語！」と得意げに

答えるのでした。校長さまのまわりにはいつも子どもたちがいてともに遊ばれ、トットちゃんの学校のようにハイカラで楽しい学校でした。最上級生が四年生になったとき、ジョリーナは小学生が覚えたこの英語をバネに英語劇を上演し社会に披露しようとの拡大な発想をなさいました。

英語劇〝赤ずきんちゃん〟を東横ホールで上演

「英語劇をするには子どもたちがよく知っていて好きな物語でなければいけない」と、いわれて赤ずきんちゃんを選び、子ども向きにやさしい脚本をつくられたのはやさしいのですが発音指導はきびしく、子どもたちはなかなかパスさせてもらえないようでした。

いよいよ上演の日、イタリア大使、バチカン大使をはじめ大勢の外国人と父母のみなさん方で会場は満席となりました。おおかみほか大人の役は四年生、赤ずきんちゃんは二年生、花の妖精は、一、二年生が担当しました。子どもたちは広い舞台をいっぱいに使い、誰もが主役気分で自信に満ちた大きな演技を見せてくれました。

観客席からの盛大な拍手喝采を浴びながら静かに幕が下り大成功のうちに終了しました。

思えば開校四年目で四年生までしかいない小たことは星美の英語教師になって活躍していてを主にかけていらしたからではないでしょうか。あれから四五年、赤ずきんちゃんは立派な英

都市計画の壁にぶつかって

開校三年目、校舎増築申請の折にお役所の方から「この校舎は都市計画上かかっているのではないか」と、いわれましたね。その計画はすでに破棄されており、ただ図面上にだけ残っているものでしたのに、それが原因で建築許可は許されませんでした。

それからというものはシスター・アンジョリーナのお役所通いが始まり、私たちのために働く宣教女ていることを知って、私はとても申し訳なくまた、恥ずかしく思いました。ョリーナは「私の十字架は上からくるらしくてといっていつもにこにこしてました。

その後、時間はかかりましたがうまく解消できました。

校地拡張に当たって

それから間もなく中学校の校地探しがはじまりました。当時は公立校ブームで都庁も私学には冷たい目を向けていましたので、開校に当たっては実現不可能なほどの広い校地を要求してきました。ご父兄の方々の奔走によって沢山の土地を紹介されましたが、どれも条件に満たず月日だけがいたずらに過ぎていき、とうとう一期生が六年生となりました。シスター・アンジェリーナは五月には聖母マリアに、六月はイエスのみ心に、そして七月にはイエスの御血にと期待をかけてました。八月もみつかりませんでした。九月も過ぎようとするある日シスターはこんなことをポツリと言ってました。

「中学校設立の認可をとり、校舎建築をはじめ落成するまでには、最低六カ月は必要なのに、まだ土地がみつからないない」

「でも、私たちの学校はマリアさまの学校だからマリアさまがきっと助けて下さる」と、何事にも動じないその態度を思い起こすときシスターは「恐れることはない、主がともにおられる」との聖書のことばに生きていらしたのでないかと思います。

一〇月はじめ遂に土地を獲得できました。

こうして、学園の草創期、建設期も過ぎ充実期に入ると目黒星美もそれなりの評価をされるようになりました。私はそのころ管理職につきました。あるとき管区長さまから日黒星美が発展した理由はどこにあると思いますかときかれました。私はシスター・アンジョリーナから常々、「私たち学校は家庭であり家族です。父母、教職員、児童たちの名前を覚えて、一人一人を名前で呼び、心の通いあう学校でなければいけない」と、いわれてきました。私はこれこそドン・ボスコの予防教育法の真髄であろうと考え大いに賛同し、その意をひきついできたからだと思いますと答えました。

おそれることはない。わたしはあなたとともにいる。との主のみことばに生きてこられたシスター・アンジョリーナ、年齢を重ねられてもいつまでも若さをなくさずにいらっしゃいますように。ご健康をお祈りいたします。

聖なる楽観主義

'59～'63／担任・'63～'66／中学国語・'01～'04／中高宗教　シスター・セリーナ　福井直子

今回、「目黒星美学園物語」の出版に当たり、シスター・アンジョリーナ・バローネ校長様の思い出を語らせていただくチャンスを与えてくださった同窓会編集者の皆様に感謝いたします。

私が、シスター・アンジョリーナ校長様とご一緒に生活いたしましたのは、一九六六年の七年間でした。赤羽の本部修道院から初めての異動で目黒星美学園小学校に赴任することになりました時、シスター・アンジョリーナ校長様と、シスター杉村が来てくださり、あのこぢんまりとした碑文谷の校舎の一角で生活を共にすることになりました。

校長様であり、同時に共同体の院長様でもあられたシスター・アンジョリーナはどっしりと威厳があり、しかも柔和そのもののお姿で誰に対しても差別なく接しておられました。

日本語も大変流暢で、私たち日本人より美しい敬語をきちんと使っておられ堂でも、美しい柔らかなお声でラテン語・イタリア語の聖歌を歌っておられたことも、印象深く残っております。

今でも、ラテン語・イタリア語の聖歌は、お見舞いの同窓生と共にお歌いになりますとか。

当時は、中学校・高等学校の設立を目指して文字通り東奔西走の毎日でした。やっと、世田谷大蔵に土地を購入することができて、建築が始まってからは工事現場もよく監督しておられました。

この建築のために莫大な費用がかかったのですから、当然経済的には苦しかったのです。そのために、どれほどの深い信仰と信頼をもって神さまと聖母マリアさまに委託し祈っておられたことか。心中どれほどの心配があってもいつも聖なる楽観主義で、明るく振る舞っておられ

ました。ドン・ボスコのように。

時折、祖国イタリアのご両親の昔話や、お姉さま方のことなど愛情こめて話しておられ、私たちまで家族の一員のような錯覚をおこし、イタリアへの憧れを深めたものでした。

一九六六年以降は生活を共にはできませんでしたが、会議の折りとか、黙想会の折りなどお目にかかりましたが、いつも変わらぬ愛情溢れる眼差しで話しかけてくださいました。

私の修道生活の初期に、本当にドン・ボスコの精神、特に聖なる楽観主義と聖母マリアに対する深い信頼を培っていただいたと思い感謝しております。

恐らく卒業生の皆さんもそうだと思います。シスター・アンジョリーナ校長さまが、この本を手にしてすべての同窓生と共に、喜んでくださる日を期待しております。

シスター・アンジョリーナ・バローネに捧ぐ

五期生の麻生マユ様からこの原稿を依頼されたとき、恩師を慕う同級生たちの心の中に、シスター・アンジョリーナへの思慕と感謝の想いが、今なお脈打っていることに深い感動を覚えました。

'60～'72／中学社会(世界史)・宗教　シスター・マリエッタ　中島ユリ子先生

私はシスターになった翌年の四月、一期生の中学入学とともにこの学園の校門をくぐりました。あれから四〇年以上経過しました。ふり返ってみますとき、苦楽を共にした方々がいらっしゃると思い出が走馬灯のように脳裏を去来いたします。

皆様のなかにも同じ思い出をもっていらっしゃると思いますので、記述するのを割愛し、私はシスター・アンジョリーナのお人柄のほんの一端を披露させていただきたいと思います。

「主よ、私を平和の道具としてお使い下さい」

人はそれぞれの使命を神から託されてこの世に生を受けます。

シスターは二五歳のうら若い青春時代を最愛のキリストにささげ、神への愛を伝えるために宣教女として、祖国イタリアを、愛する家族を後に未知の日本の地に第一歩を刻まれました。

時は第二時世界大戦前、大戦中の不穏な世相のなかで、また、戦後のどさくさのなかで、苦労、辛酸をなめながら、ご自分の全エネルギーを燃焼されました。

いつも笑顔を絶やさず、「主よ、あなたをお愛しいたします。私をあなたの平和の道具としてお使い下さい」と口ずさみながら。

目黒星美学園小学校、中学校、高等学校の学園創設の歴史をひもとく時、人の偉業は、神が謙虚な道具である彼女を使ってご自分のお望みを行われたと私は信じております。

家をなくし、職を失って路頭をさ迷う青少年たちのために生涯をささげ尽くしたドン・ボスコの伝記を読んで、神と聖母の不思議なみ手を感じ驚かされたものです。

食べ物がなくなるとパンを増加させたり、収容する場所がなくなると、篤志家が現れて建築のために大金を寄付してくれたり、ドン・ボスコの身辺に悪漢が現れると、グリージョという大きな犬がどこからともなく現れて身の危険から守ってくれるなどの奇跡をみて驚嘆を禁じ得ませんでした。

それに似たようなことを、アンジョリーナ校長様に見ることができました。

学校建設のための土地の問題、資金繰り、学校設置認可の問題など、山積みする難問を抱えてある時は東京都に、そして各界の篤志家のもとに、またある時は、有力な支え手であるシスター・テレジーナ笹田とともに足早に、または重い足取りで足繁く東奔西走する姿を目の当たりにしました。それらが不思議な力で解決していくのをみることができました。しかし、どんなに忙しくても、疲れていても教育を優先させ、生徒たちと接する時間を大切にしていらっしゃいました。

一貫して信仰と信念の人

シスター・アンジョリーナはいつも朗らかで、満面に笑顔をたたえており、多くの人を魅了する雰囲気をもった方でした。

それは、ドン・ボスコがそうであったように、苦しみのるつぼの只中にあった時も、快活で平静であり得たのです。内面に神への信仰の錨を深く下ろしていたからです。

こんなことがありました。調理係のシスターが購入したお皿をしまう場所がなかったとき、小さな食器棚にはいっぱいで入りません」とたずねたとき、冗談を交えて真顔で「天井に吊るしましょうよ」とおっしゃったのです。シスターはその返事の意外さに耳を疑ったほどでした。しかし、この時、アンジョリーナ院長様はある一つの急を要する重大な問題を前にして、頭が一杯だったのです。普通だと「私が抱えている問題に比べればそんな事、大した問題じゃないでしょ。人をわずらわせないで自分で工夫しなさいよ」と言って一蹴するのでしょうが平静さを失ったり、不忍耐を起こしたり、相手を無視したり、傷つけたりしない態度には感服しました。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」とは中国の王陽明の言ですが、学校でも修道院でもだれに対しても、いつもやさしく対応してくださった大物、つねに自己を支配していらっしゃった方でした。

そこには、やはり、繰り返して申しますが、神への深い信仰と信頼から、楽観主義、人を思いやる慈愛の心があったからだと思います。

「聖母よ、あなたを信頼して見捨てられたことは一つもありません」（聖ベルナルド）

一九六二年の夏のことでした。翌年三月は、中学第一回の卒業式、四月には、高校入学が半年後に迫っておりました。校舎も第三工事を控えており、都の方からは辛うじて高校設立の認可はおりていたものの、肝心の私たちの修道会のローマ本部からの認可が届いておりませんでした。一方、生徒の父母たちは、「校長様、高校はどうなるのですか、娘たちの進学は保証してくれますか」と、来る日も来る日も質問攻めにあっていらっしゃいました。

七月初め、校長様は黙想会のため山中湖の黙想の家に行かれました。この大きな悩みを抱えて。しかし、磐石のような信仰は今までも幾多の困難を前にして失望することはなかったのです。

「ある日の夕方、あたりは薄暗く、虫の音がかすかに聞こえるルルドの聖母の前で一人祈っていると、『わが娘よ、私の愛する生徒たちを見捨てることがどうしてできましょうか。今までわたしのマントの中にかくまってきました。これからもそうします。それでご安心なさい。わたしが考えます』という声がはっきりと心の中に聞こえてきたのです。その瞬間、垂れこめて

いた暗雲が晴れて、得も言われぬ安堵感が心にみなぎるのを覚えました」と述懐してくださっ
たことばを忘れることができません。

そして、九月五日、ローマ本部から校舎増築と高校設置の許可がおり、九月二三日、竹中工務店と契約を結び第三工事に取りかかる運びとなりました。

後になってわかったのですが、毎朝ミサを立てに来てくださっていた、サレジオ会のヨゼフ・カッロ神父様がシスターたちの窮状を知り、校舎内では傘が必要である（校舎が未完成のため雨漏りがするという意味）こと、シスターたちの学校は東京都からも信頼されており、校舎建築を急がねばならないなどの内容で本会のローマ本部の上長に手紙を書いてくださったそうです。ご本人がシスター・テレジーナ笹田にお話しなさったそうです。

ここにも聖母マリアのたすけのみ手をみることができました。

校舎の屋上におかれている無原罪の聖母像は、聖母のお恵みと多くの恩人方の協力への感謝のしるしとして建てられたものです。

今も、道ゆく人、夜は心身のやすらぎを求めて、ライトアップされた聖母を仰ぐ人々に恵みを注ぎ続けていらっしゃいます。

同窓生の皆様、この恵まれた学園で学んだ教えやなつかしい思い出を基盤として、どんなときも心の灯を消すことなく前進してください。そして、渾沌とした社会の中にあって、家庭、

職場、近隣で真の愛、幸福、心の渇きをいやしてくれるお方を暗に求めている人々の道しるべとなってください。

そうすることによって今、病床でご自分をすべて神にゆだねて病苦をささげているシスター・アンジョリーナ・バローネへの感謝の気持ちの表明としたいものです。

思い出ずるまゝに

'59～'89／担任　石松寿美子先生

昭和三四年四月、目黒星美学園小学校が一年生から六年生まで、A組は男子、B・C組が女子の学年体制として一年ごとに増え全学年一八学級がすべて整ったその年、包容力豊かなアンジョリーナ・バローネ校長様のもと、二期生の五年生担任として勤めさせていただいたその頃を今でも何かにつけ思い出され、なつかしさでいっぱいになります。

すっかり見事に新装なった現在の校舎を目のあたりにするとき、まだ以前の体育館が建てられた一画が畠であった四五年も前の当時の様子が断片的ながらもとめどもなく頭の中を駆け巡ります。

楽しそうに元気に校庭で遊ぶ児童を目にしても休み時間五、六年女子は音楽室のあった屋上

で遊んだものだったと思うのです。購買部寄りの階段は男子、保健室側の階段は女子が使用と決められていたことも思い出です。

服装にしても夏服も長袖、運動会でも女子はブルマーキューロットを着用したものつばめ号で京都。奈良に行きました。その後、まるで海外旅行の計画を立てるようだと云われるような会議を重ねすっかり今の学年ごとの郊外学習が定着しました。

体育館ができてそちらに移られるまでは二階の一隅に修道院がありました。五、六年生は各自椅子を学校から持参して練習に励んだことも昔のことです。

入学式は三階の打ち抜き教室で行いました。卒業式もサレジオ教会の後にあったサレジオ講堂で行ったものでした。

それにしても学園の発展の今日に至るまでの道のりには大変なものがありましたこと、それにもましたシスター方のお骨折りは勿論特に土地の入手、中学歴代の校長様、シスター・アンジョリーナ・バローネ校長様、シスターいつもご一緒に奔走されたご苦労は如何ばかりであったかと思わずにはいられないのです。

ひとつぶの飴

小野せつ子先生

'57～'86／担任

つい先日、「ここをこのように展開し、こう問いかけたら……」と、しきりに授業を練っている最中に、ふと日が覚めました。教員を退職してそろそろ二〇年にもなろうとする今でも、こんな夢を見るなんて、我ながらあきれてしまいました。そうです、私の生涯の大半は、目黒星美の中に生き、育てられてきたのだと、折にふれて思うのです。

その、育ててくれた星美というのは、シスターであり、同僚であり、子どもたちですが、りわけ創立期の校長様、アンジョリーナはその思いをいっそう深めてくれます。

目黒星美の教員になって間もないころ、アンジョリーナ校長様と廊下でちょっとした立ち話をしていました。そのときの話の内容は忘れてしまったのですが、私が「経験をいろいろ積めることはすばらしい」というようなことを言いました。すると校長様は「経験というのはできるものではありません、つくるものです」と、さらりとひとことおっしゃったのです。私はハッとしました。いろいろな経験をしても、それが実にならないで、成熟しないことが多いものだと。経験ができていないのだと思いました。廊下でのちらっとした話で、私は深く教えられ、ずっと覚えていることばになりました。

まだ学校も組織化されず、生まれてホヤホヤの時でしたが、それでも、先生も子どももよく活動し、多くの行事もりっぱにこなしていました。とにかく目黒星美は家庭的で暖かいと、自他ともに認め、誇らしく話し合ったものでした。

一年間に二回ほど、保護者と担任との個人面接があるのです。子どもたちを帰らせたあと、四時過ぎまでお母様一人ひとりと、学習のこと、生活のことなど話をするのです。一人終わったと思うと、すぐ次のお母様が入ってくるということで、担任にとってはかなりきつい期間なのです。

あるとき、面接をしていると、「先生、校長様がお呼びです」と声をかけられたのです。「えっ、こんなときに何かしら」と校長室に行ってみると、校長様は「先生、疲れるでしょう」と、ご自分のポケットから飴をとり出して、「ここでなめていらっしゃい」とおっしゃったのです。一つぶの飴と、小さな休息を下さったことが何とうれしかったことか。思いやりと暖かさ、「家庭的です」とおっしゃる通りの母親の愛！　その飴をひとなめして、意気を新たにして、その後の面接を続けたことを覚えています。

学校をこれから創っていくという時期ですから、アンジョリーナ校長様と、まだご一緒に働いておられたシスター・テレジーナとは、来る日も来る日も役所関係、建設関係など、毎日奔走し、学校に腰をすえていらっしゃるひまはなかったのです。そのご苦労はどれほど大変であ

ったか、何もおっしゃらなくても察することができました。

最初の構想は、この地に小学校から高校までという青写真があったのですが、不可能になっていたときも、まだ中学の土地も決まらず、二学期も始まって、六年担任の私なども「どうするの」と心細くなっていました。

男子はサレジオ中学ができ、受験して……ということが考えられますが、気ではなかったそうです。学校にも保護者の不安が伝わってきていたようです。人の保護者が悩んだあげく校長様を訪ねてきて、「中学校はできるのか、できないのか言ってください」と言ってきたそうです。アンジョリーナ校長様は、即座に確信をもって「できます」とただひとことお答えになったそうです。すると、その保護者は「それだけ聞けばけっこうです」といって、あとは何も言わずに帰っていったということです。校長様の固い信仰、神様は必ず成就してくださるというゆるぎない信頼が、校長様にみなぎっていたのだと思います。だから保護者も、これなら大丈夫と得心して帰ったのでしょう。

それから間もなく、世田谷の今の地を手に入れることができ、突貫工事にて建てたのだと思います。

一期生はいつも建設中で、未完成の建物と騒音の中で過ごしていましたが、何でもよくがんばっていました。この父母、子どもたち、シスター、先生方と、そろって目が、それは困難で黒星美がりっぱに入ったのです。目

てきたのです。
深い信仰、神による愛、そこに集うシスター、先生、そしておおらかな子どもたち、いいなあと思います。ここに過ごさせていただき育てられたことを感謝しております。
アンジョリーナ校長様、今は老後のお体を休ませていらっしゃいますが、お心はきっと明るく信仰の清々しさをたたえていらっしゃるでしょう。お心安らかな日々でありますように。

神様の思し召し

'56～'62、'63～'67／担任　河住(旧姓　落合)富士子先生

今年も間もなく扶助者聖母の祝日が巡って参ります。星美学園小学校の生徒たちは、白百合を手に、当時のアンジョリーナ・バローネ校長様を先頭にマリア像を囲んで星美学園小学校の校庭からサレジオ教会へと、聖歌を歌いながら行列をいたしましたこと、今も忘れることのできない思い出の一つになっております。
そして、アンジョリーナ校長様は、私にとって初めての女性の外国人であり、修道院入会志望の私にとっては、あこがれのシスターでした。
どっしりとしたお姿、お優しいお顔、美しい澄んだお声、暖かいふくよかなお手、すべて私

の心を和ませて下さいました。又、校長様の英語の授業は、生徒はもちろんのこと、私までも楽しみな時間でした。ＡＢＣの歌、お星様の歌、等々一緒に歌わせていただきました。

また、不思議なことに校長様は時折生徒たちの喜ぶキャンディーを手品のようにお出しになりニコニコ顔で一人ひとりにお渡しになっていらっしゃいました。何時、何処で用意なさったのでしょうか。

もう一つ、どなたにもお話ししたことのない出来事がありました。それは、私が当時下宿生活をしておりましたので可哀相とお思いになられたのでしょうか、何度か「これを」とおっしゃってこっそりと小さな包みを渡してくださいました。中にはお魚が入っていました。「今夜のおかずに」との御配慮だったと思います。今も感謝の気持ちを忘れることはありません。家庭の事情と体の弱かった私は、校長様のご期待に添えず修道院入会を諦めざるを得ませんでした。申し訳ない気持ちと情けない気持ちでいっぱいでした。でも、これも「神様の思し召し」と慰めて下さったのもアンジョリーナ校長様でした。

長い間生活に追われ、お目にかかるチャンスも少なく過ごして参りました。今更ながら今までの御恩を思い、お体の具合、如何かと御案じ申し上げております。幸いなことに、只今、教会で信者の家庭が我が家にいらしておられますので、校長様のために御祈りさせていただきます。長女の霊名貸し出しをしているマリア像はマルガリタ・マリアの名付け親はアンジョリー

ナ校長様でした。娘二人もお祈りさせていただきます。
星美学園創立のためシスター・テレジーナと何時も一緒にお出掛けが多く数々のご活躍をなされましたこと、そのお二人のお姿は私の心の中にシルエットとなって残っております。
アンジョリーナ校長様、何時までも私たちの太陽でいらして下さい。神様の愛に囲まれごゆっくりご静養なされますよう、お祈り申し上げております。

シスター・アンジョリーナ・バローネの思い出

'62～'01／数学　岸良聰吉先生

シスター・アンジョリーナ・バローネの思い出をとの御依頼を受け、いろいろと具体的な出来事やエピソードをと考えてみたのだが、これがほとんどないことに気付かされた。あれだけ長い間、毎日顔を会わせて、お話をしたこともあったと思うのに、これは一体どうしたことかと考えてみた。そして、次のようなことに気付いた。
当時、副校長格として、シスター笹田が校長としての指示や相談を全部やっておられ、われわれ教職員も校長様（当時の呼び方）にお伝えすることはシスター笹田に申し上げていたので、校長様と仕事の上で接することはほとんどなかった。そういうことで、校長と教職員との関係

としての具体的な思い出がほとんどないものと思われる。

私のシスター・アンジョリーナ・バローネへの思いは、校長としてのシスターに対するものではなく、学校全体の母親としてのシスターの広い抱擁力に裏づけられた優しさによるものであろう。

特に、生徒に向けられた愛情は特別で、私の子どもたちという気持ちで生徒に接しておられたように思う。要するに、シスター・アンジョリーナ・バローネの思い出は、個々の具体的な事柄によるものではなく、その全人格への思慕として強く残っている。

想い出

'61～'82／理科　後藤(旧姓　林)美智子先生

青い空、空に向かってすくすく伸びる落葉松の梢、芽吹きは瑞瑞しく生命力に溢れ元気がある。そして、限りない希望が感じられる。梢の元気がよいのは根がしっかりしているからだ。

この時私は創立当時の星美の姿を感じる。見渡す限りの畑と野原に現在の学校の第一歩が始まった。「協力・勤勉・希望・前進」そしてこれ等が大きな「愛」に囲まれていた。立派な土台を築かれた初代のアンジョリーナ校長様、校長様に限りなく尽力なさったシスター笹田の力な

くして創立することはできなかったであろう。
春が来て花が咲き、蒲公英が咲き、蛙が鳴く。夏になれば庭一面が万緑、山からの涼風。秋には竜胆、紅葉。冬は大雪で真白。こんな四季の中に私は今生活しているが、この四季は自然に囲まれた創立当時の星美学園と何時も重なる。今在る自分に感謝しアンジョリーナ校長様が一日も永く穏やかに御生活なされるよう心からお祈り申し上げている。

追記

私は一回生、二回生各二クラス全部で四クラスの時、すなわち創立二年目に赴任いたしました。星美学園を巣立っていかれた卒業生の皆様、諸先輩の方々なくしては自分たちは存在しないことを肝に銘じて時にふれ母校のことを思い今の生活を大切にすることを願っております。

シスター・アンジョリーナ・バローネの思いで

'64～'71／理科　酒井俊雄先生

私が目黒星美学園に勤務したのは、東京オリンピックが開催された昭和三九年でした。初めての女子高しかもミッションスクールということで大変緊張して登校しました。修道会が経営

している学校ですので、さぞ規則・規則で縛られた固い校風と想像していたのですが、来てみると大分様子が違い、意外と明るい、自由で家庭的な雰囲気で安心しました。

その当時校長をしていたのがシスター・アンジョリーナ・バローネでした。も明るく、ニコニコしており、割と自由な考えを持っていました。そのことがり上げていたのだと思います。

星美に来てまず驚いたのは昼食の時間でした、その時間になると生徒たちはし、数名のグループを作り、大声で話しながら楽しそうに食事をはじめたので姿勢をただし沈黙のうちにするものと思っておりましたので、驚いて校長に尋行為と考えており、食事中に大声で話をすることはしたことがありました。シスタ話しながら、楽しく食べたほうが健康的にも精神的にも良いのですと答えられったしだいです。

このように、既成概念に捕らわれず自由に発想するという所があり、持ち前で生徒を見守ってくれます。多くの生徒や先生に愛がこれからも私たちを見守って下さるようお願シスターの上に神様の祝福が豊かにおるようにお祈りいたします。

雑感

'58～'61／担任　鈴木(旧姓　阪本)米子先生

私が初めて目黒星美学園小学校にうかがったのは一九五八年（昭和三三年）の三月でした。受付のシスター・アスンタが、満面の笑みで応接室に案内して下さいました。廊下もどこもピカピカに磨かれていて前年教育実習で行った渋谷区立の小学校とは大違いできれいなのにびっくりしました。

少しドキドキしながら四、五分たったでしょうか。シスター・アンジョリート校長様とシスター・テレジーナが入っていらっしゃいました。校長様はとてもにこやかなお顔で笑みが絶えることなく何か神神しい感じが致しました。「子どもは好きですか」の問いかけに私は迷うことなく「はい、大好きです」と申しました。お二人は、イタリア語で話されたりしながら私にはむずかしいことをお聞きになることなく自然の会話でした。流暢な日本語をお話されるのには感服するばかりでした。校長様とシスター・テレジーナの何ともいえない暖かいお人柄に触れ、感動しながらこの学校に奉職したいという思いがいっぱいで帰宅しました。

そして五期生の担任が決まり入学式前の名札作りなどまだ会ったことのない子どもたちの可愛い顔を想像しながらの作業は楽しいものでした。入学式の日、新入生を前にして校長様が、

「これからは星美でみなさんと楽しくすごしましょう。学校では私がみなさんのお母さんです。泣きたくなったら『校長様、泣いていいですか』と、私の所へいらっしゃい。そしたら『ええ、いいですよ。いっぱい泣きなさい』と言って抱きしめてあげましょう。何も心配はいらないのですよ」とにこにこしてお話になりました。何と優しく包容力のあるお言葉かと思いました。

後日、校長様が私に「星美の子どものお母様たちは、みんな良い人ばかりですよ」とおっしゃいましたが、子どもたちはみんな良い家庭環境の中で育ち、子どもらしくしつけもゆき届いてそのとおりだと実感しました。大学を出たばかりで経験のない私で至らないことばかりでしたが校長様はじめシスターや諸先生方に支えられながら子どもたちとすごした三年間は本当に楽しく感謝でいっぱいでした。いろいろな行事も楽しく思い出されます。

二〇〇一年二月に村井さん（石川先生）と調布にいらっしゃいます校長様をお訪ねしました。シスター・テレジーナにも御一緒にお目にかからせていただきました。あのにこやかなお顔は以前と全くお変わりになることなく階段の上り下りもしっかりしたお足元でいらっしゃいました。シスター・テレジーナはいつも校長様の横で優しくお気遣いになっていらっしゃいました。

校長様は「私は、とても幸せです。いつも感謝してい[ます]」と何度も何度もおっしゃっていました。私共の訪問にもお喜び下さいましてお訪ねしてよかったと思いました。

私事ですが健康維持のつもりでこの十年程横浜の気功太極拳教室に通っております。そこで

親しいお友達ができお話ししている中で、お子様がとても暖かい良い学校に通うことができ幸せだったこと、当時の御父兄とは今もお付き合いが続いていること等聞いてはいましたが、後ほど星美の六期生のお母様でいらっしゃることがわかりました。それまで星美のことをずっと大切に思われて懐かしんでそのよさも思っていないことでした。お母様が星美のことをひかえめですが誇りをもって話されており、こういうお母様が星美を陰ながら支えてくださっていることも知りました。なんという偶然の出会いかと驚きました。校長様がご入院中のこともお話ししましたら大そう御心配になっていらっしゃいました。

昨年の同窓会では校長様にお目もじできませず大変残念に思っております。校長様の御回復と共に星美のますますの御発展を心よりお祈り申し上げます。

星美の伝統を感じるこの頃

'62～現講師／社会、書道　須藤　清先生

月日の流れはやはり速かった。

どこに校舎があるのだろうかと不安げに、最初に星美中を訪ねたあの日。表の通りも、裏の

通りも、正門から校舎への道も土の道。雨の日はぬかるみ、生徒が一列になって通る道。正門も裏門もはっきりしない。周囲に塀がないので学校の土地がどこまでなのかもはっきり見えない。夏休みの後は、グランド一面に雑草（木）が生い茂った。その丈は生徒の背丈よりも高く、一、二、三期生たちは喜んで、かくれんぼをして遊んだものだ。

草木が生い茂り、原っぱというか、畑というか、その中に今の三分の一の校舎（会議室と高三ABの教室まで）がポツンと建っていた。他に修院もなければ体育館もない。ただ、それだけである。

私は大規模の公立校に、三年間勤務した後の着任だったので、不思議な気持ちだった。小さいけれども学校なんだと思った。教会には行っていたので、その様子は大体わかっていた。

しかし、シスターはどこに住んでおられるのだろうと思ったら校舎の中であった。これもまた不思議であった。

私の採用に当たっては、アンジョリーナ校長様、笹田副校長様と面接した。初めての独身男性教諭採用とあって、色々と尋ねられた。その一つ目は、政治経済担当なので社会主義思想を極端に恐れていた（この当時、世間は共産主義思想を極端に恐れていた）。二つ目は、国語も担当し、植えつけられる心配しい（それは、中・高では無理であるがそれでも六年間頑張った）。三つ目は、週二三時間持ってほやってほしい（日本の書道文化に大変強い関心を示してくれた）。四つ目に、ク

ラブ活動は卓球部と書道部を持ってほしい。最後にカトリック校として、女生徒を扱う規定を話されたと記憶する。

その年度の入学式・始業式は四月の中頃であった。これもまた不思議であった（後で復活祭との関係であることがわかった）。私は待ちきれずに四月の初めから出勤し、仕事をさせてほしいとお願いした。当初の仕事は、その時発行していた学校債券氏名の筆書きであった。私は内心、その金額に驚き、ご父母の並々ならぬ協力を感じた。それは、歩みはじめた聖美学園への期待感そのものであった。

始業の日になり、先生方と初めて会った。職員室は今の会議室を三等分に区切った真ん中であった。前方の三分の一は保健室と印刷室であった。驚いたことに、同時着任の岸良先生と私以外はすべて女性の先生であった。これには圧倒されたが皆、親切にしてくれた（他に年輩の男性講師が二名おられた）。驚くこと、不思議なことは次々と現れた。しかし、不安はなかった。それは岸良先生から色々なご指導をいただいたからである。

一か月経ち、二か月経ちして、宗教色のある学校にも馴れ、女子校にも馴れていった。生徒を静かな眼で観察できるようにもなった。そして、生徒を怒らなくてもすむ学校であることを（注意は別）、生徒は家庭でも愛され、学校でも愛されているのだと知った。私は生徒が何をやっても、指導の後は心の底から〝ゆるす〟ことができるようになった。

アンジョリーナ校長様の職員朝礼は、正に祈りの時であった。「今、こういう問題を抱えているから祈ってください」「今日はこういうことがあるから祈ってください」と、連日のように発表され、皆で心を合わせて祈った。

着任して一学期が過ぎた頃、教頭の岸良先生は、生徒会を組織し、クラブ・生徒会・委員会運営に取り組まれたと記憶する。私も及ばずながら、生徒会の教育課程との協力態勢は現在も全く変わりがない）。

先生方みんなが積極的に協力してくれた（こ

時が一年経ち、二年経ち、校舎も三年かけて次の三分の一、また三年かけて最後の三分の一、二期生が高二になった。その頃から、不安感に襲われる日々が続いた。この生徒たちは大学に合格するのであろうか。本当に十分な実力がついているのであろうかと。大丈夫だと自分に言い聞かせても全く実績がないのだから実に空虚な線路が敷かれていないのだ。進むのだ。もしかして大学受験の結果が悪ければどうしようかと思った。居ても立ってもいられず、夏休みには先生方が分担して、生徒が行っている予備校を回り、受験生を叱咤激励した。

大学受験の結果は想像以上によいものであった。みんな安堵し、自信を深めた。それは小学

校の六年間、中高の六年間の結実であった。しかし、中高が本当に軌道に乗るには約十年を要した。その間、進もうとしている前方に道ができていないという体験は何ものにも替え難いと思った。そういう雰囲気は日々感じることもできた。それは、いくら苦しくても、みんなで耐え、協力する雰囲気である（この雰囲気は今も引き継がれている）。

さて、一期生は誕生日が来て五七歳だと聞く。現中一生は四五期生であるが、現中一生は五〇年の歳月が流れ、「金祝」の頃となった。人間性豊かな生徒たちに満ち、校法人としても学園に成長し、ようやく星美という伝統を感じる頃となった。イエス様もマリアさまもお喜んでくれていると信じる。初代のアンジョリーナ校長様も心から喜んで下さい。草創期すばらしい学園と全く変わってしまった。しかし、一歩、学園のキャンパス内に入ると、から。

いま、学校の外はすっかり変わってしまった。高い樹々に囲まれた真緑のグランド。耳を澄ますと、草創期と全く変わっていない。して野鳥の声が聞こえてくる。

ピラミッドは底辺が広がらなければ高くはならない。永劫の星美学園のために、在校生、卒業生たちの同窓会、教職員が三位一体となって、心豊かな底辺、堅実な土台を作ろう。そして、神さまや、ドン・ボスコが望んだ学園を皆で築きあげよう！

草創期の思ひ出

'54～'58／担任　楚良（旧姓　藤田）叔子先生

碑文谷の地に新たなるミッションを育まむとしき伊国の修道女（シスター）ら

満面に笑を湛（たたえ）へし校長様朝校門に佇（た）ちて子等待ちき

アンジョリーナ校長様直々に子等に教ふる（う）ABCのうた

幼き絵そごう会場に揚げられ喜ばれしこと遥かなる記憶

「マルコ漁師」子ら演じたるオペレッタ、ダルフィオル神父の指導の熱き

お背高く購買部担ひし（い）Sr（ッル）・ジョゼッピーナ常に優しく接したまひ（い）き

薫風の吹き渡る校庭聖母月サンタマリアの学童あゆむ

アンジョリーナ校長様の思い出

'57～'95／担任、理科　横尾千畝先生

私がはじめてシスター・アンジョリーナ校長様にお会いしてから、四八年の年月が流れました。

当時、目黒星美学園小学校は、創立してまだ四年目でしたので、旧校舎は未完成の状態で、校庭の一部は農地でありました。

土地もない資金もない学園で、校長様をはじめシスター方、そして幼い子どもたちは、聖母マリア様の助けを願いながらひたすら校舎ができるのを待ち望んでいました。校長様は、高学年に英語を教えるかたわらしばしばシスター・テレジーナと一緒に都庁に足を運ばれ、校舎の完成のために折衝されていました。そんな時は、いつも子どもたちに「今日はマリア様によくお祈りしてね」といってお出かけになりました。

校長様の英語の授業には、毎回私も出席していましたのでよく覚えています。英語の歌ではじまり、手作りの英語カードや絵などを使っての授業は、子どもたちにとって楽しいひとときでした。

戦時中から、戦後における山中での戦災孤児との生活については、後日、直接インタビュー

をしたときの録音テープが手元にありますが、当時の宣教女の苦労がよくわかります。

戦後の物のないころ、校長様は、子どもたちに履かせる下駄をもらいに山梨県庁を訪ねたとき、応対した米軍の将校の方から、子どもたちのために学校を建てては、と勧められたのが星美学園のはじまりであるとのことでした。

昭和二九年「聖母聖年」の年には、目黒区碑文谷に星美学園第二小学校を開校しましたが、その時はまだ校舎もなく、土地もない状態だったそうです。そこでサレジオ幼稚園の二階を借りて、授業をはじめられたのです。

子どもたちは、幼稚園の窓から畑を眺めては、校舎が建つ日を夢に見ていたそうです。

私が学園に奉職したころは、まだ経済的に貧しくて、現在のように恵まれた教育施設も教材もありませんでしたので、校長様にお願いして、教材作りのための大工道具を購入してもらいました。その道具は、私が学園を退職するまで大切に使わせてもらい、星美の手作り理科の教材を生み出しました。

校長様とのお別れの日、目黒を離れる寂しさからか涙を流されていたことが印象に残っています。

時の流れとともに、学園も大きく変わりましたが、創立期に見られた家族的な雰囲気や伝統は、いつまでも受け継いでもらいたいものです。

目黒星美学園とともに歩まれ、心より学園を愛された「アンジョリーナ校長様」の上に、神様の豊かなお恵みがありますようにお祈りいたします。

第3章

生徒たちの証言

「安心して私の学校へいらっしゃい」

一期〇伊澤(旧姓　大川)陽子

一九六〇年、私は初めてアンジョリーナ・バローネ校長様にお会いしました。

私は当時、聖ドミニコ学園小学校の六年生で一期生でしたが、できるはずの中学校が諸事情により間に合わず、私たちの親は二～三カ月の間に子どもたちの中学校を探さなければなりませんでした。悩まれた聖ドミニコ学園の校長様が目黒星美学園の校長様に、私たちの入学許可をお願いに上がったところ、星美の校長様は快く私たちに会うことを約束してくださったそうです。

それから間もなく、私たちは入学に当たっての筆記テストと面接を受けることになり、私を含めて九人の生徒が目黒星美学園を訪れました。私は友だちと一緒だったせいかそれほど不安は感じませんでしたが、それでも少し緊張していました。校門をくぐると、小柄でふくよかな面立ちの校長様が両手を広げ、満面に笑みをうかべて私たちを出迎えて下さいました。その様子は、「安心して私の学校へいらっしゃい」と言っているように見え、私は緊張が解れていくのを感じました。その考査は全然できなかったように覚えていますが、帰り際、一人一人の手を握って、また安心させてくださったのでした。そして四月には、聖ドミニコ学園の九人の生

徒が揃って入学できることになりました。

思えば、ベビー・ブームの真っ只中にあったことは幸運であったとつくづく思います。中・高の校長職に就かれていた間のシスター・アンジョリーナ・バローネが私たちの教育にいかに心を砕いて苦労されたかははかり知れません。娘時代に祖国イタリアを離れ、以来五〇年日本の子どもたちの教育に全身全霊を傾け修道生活を送られたシスター・アンジョリーナを労り感謝を捧げたいと存じます。

神様のご加護の下でゆっくりと心身を癒されますようお祈り申し上げます。

ドミニコから星美へ

一期〇市橋(旧姓　山城)八重

私は小学校六年からドミニコ学園に転入しました。

その前は一クラス五〇人が七クラスもある区立の小学校でした。ドミニコの六年生は一九人、男子が六名、女子が一三名という少人数でお祈りや聖歌、英語、フランス語と初めてのことばかりでしたが学校生活には中学部ができないことがわかり、区立の中学に行った方、男子は星美学園にと

いうお話があり女子の八名が星美にお世話になることになりました。多分親たちと思います。

ドミニコの校長様がアンジョリーナ校長様やシスター・テレジーナにかけあってくださったのだと思います。私たちは自分のことながら何もわからなかった状態でして、親の決断でことが運んでいきました。星美も中学校をつくる折りには、アンジョリーナ校長様やシスター・テレジーナを初め、多くの方々のご努力とお祈りで立ち上がったとうかがいましたおかげさまで私たちドミニコ学園の八名は星美学園へ入学させていただきましたになる頃ようやくドミニコの中学部と高等部ができ上がり数名の方がドミニコにが、すっかり星美っ子になった私たち残りの者はそのまま星美にとどまることとなったのです。当時ドミニコのシスターはマ・メール、マ・スールとお呼びし、修道服も白に近いクリーム色で、星美に変わってからは校長様、シスターとお呼びし黒い修道服で、おまけに生徒の制服も黒で生徒数も多く（決して多くはないのですが一九名に慣れていましたので）最初はびっくりしたことを覚えています。校長様は優しい笑顔でふっくらとしたお身体（失礼）、いつも一緒にいらっしゃるシスター・テレジーナは対照的で（勿論シスターの笑顔も素敵）、初めて耳にする英語で会話していたこともありましたね。

いろいろと懐かしいことをたくさん思いだしましたが、朝礼に遅れると校長様に英語で遅刻

の理由を言わなければならず、I am sorry too. because バスが遅れただの、お腹が痛かっただの、拙い英語力で言い訳をしました。

NHK技研前でバスを降り、皆いっせいに走り出すのですが、かけっこの遅い私は友達に手を引かれ、鞄を持ってもらいぜいぜいいいながら走ったものです。上手くいけばセーフ、いかなければ後は校長様の前となるわけでした。

私たちドミニコ組を快く受け入れて下さり、また長い年月を日本の子どもたちのために捧げてくださったアンジョリーナ校長様に心より感謝し、ご病気が良くなられますようにお祈り致します。

目黒星美学園を振り返って——お二人のシスターへの感謝

一期〇岡本利彦

私が目黒星美学園に入学したのは一九五四年で、ちょうど今年で五〇年になる。一半世紀である。幼稚園もサレジオ幼稚園で目黒星美学園、目黒サレジオ中学、そして高校が引っ越すまで（高二）と、同じ碑文谷の場所に約一二年間ほど通った。幼稚園から小学生当時、私は目黒区の宮が丘（現在の南）に家があり、その家と碑文谷との約一五分かけた通学路が私の懐かし

い思い出が一杯あるところである。

日本がまだ戦後の復興の緒であったときの頃で、そのときの素朴な光景……小砂利を敷き詰めた道路、小川のアメリカザリガニ、八幡様、防空壕、学校近くのお菓子や、いろいろ思い起こすと出てくる。家の近くに郵便局があり、そこに井上さんというやはり同級生の女の子がいて、時々朝寄って一緒に通ったこともある。まだ環状七号線ができていないときだが、その建設工事で一杯砂利が積んであり、そこで遊んだこともあった。

小学校では一期生で、学級数も三組と少なく、ほとんど六年間同じメンバーで皆それぞれを知っていたのも、本当に家族的であった。それにもまして、校長のシスター・アンジョリーナ・バローネや教頭のシスター・テレジーナが六年間いつも見守ってくれたことは、私の心の支えとして今でもその存在を強く感じることがある。

私は小学一年のとき大病をし、一学期をまるまる棒に振ったが、アンジョリーナや担任のテレジーナに励まされて、何とか落第せずにすんだことがあった。このとき何とか励まされて、その後の自分のいくつかの逆境に対しての力になったと信じている。

乗り切ったことが、

同じ学年には、八巻君といって、両親が外国暮らしをして帰国して編入してきた友だちがいたが、その外国スタイルにみな興味を持ったり面白がってまねてみたりしたが、仲良く打ち解けるようになった。またロシア人の子息などの外人も下級生も含めて何人かいたが、日黒星美

学園ではそのような子どもも一緒に遊んだりしながら過ごせる雰囲気があった。

三年生の頃は藤田先生という女の先生であったが、シスター・テレジーナに代わった。

四年生から六年生までは横尾先生という大変血気のある男の先生で、その意気込みを大変感じて、少なからず影響を受けた。カトリック、特に聖母マリア像に代表される清いイメージが一貫して心の中にあるが、生徒、特に男の子の教育については学校としても「プラス強さ、たくましさ、厳しさ」などを教えられた様な気がする。

藤田先生や横尾先生も何年か前の同窓会でお会いし、さすがに年波の気配があったが、昔の面影がよみがえりも貢献をされたシスター・アンジョリーナ・バローネとシスター・テレジーナ・バローネは闘病生活とお聞きした。そして日黒星美学園の創生時のもっとも特にシスター・アンジョリーナ・バローネは闘病生活とお聞きした。

私どももう五〇歳の半ばを越える年で、今まで生きてきたことをいろいろと思い起こすようになっているが、六年間過ごした小学校と特にこのお二人には私は本当に感謝している。

お二人の末永いご健勝を切にお祈りしている。

"Do you like candy?" "Yes, I like it very much."

"Do you like candy?"

シスター・アンジョリーナ・バローネ校長様とよく交わした会話です。校長様みずから英語の授業をしていただき、その実践を試される場面でした。正解を出すと「ちょっと待っていてください」とおっしゃって、二階の修道院入り口で待っていると、ニコニコしたお顔で、ポケットからバターキャンディを二、三個私の手に載せてくださいました。

ドン・ボスコはサレジオ会を設立（一八五九年）するに当たって大変な苦労をしました。管轄のトリノ司教の妨害もひどいものでしたが、教皇ピオ九世は良き理解者で、常に蔭で応援を惜しみませんでした。長い忍耐の末にようやく公式認可がおりたことをピオ九世の秘書ヴィテレスキー邸で聞いたとき、ドン・ボスコは思わずポケットから一個のキャラメルを出して言いました。「閣下、これをあなたにさしあげましょう。祝いのしるしに！」運動をはじめてから一六年の長い苦しい戦いの後、ついにこの栄冠を得、愛らしい、サレジオ会という子どもは、おぼつかないながら、ローマの日の下で、ひとり歩きできるようになりました。（＊）

シスター・アンジョリーナ・バローネ校長様のキャンディはドン・ボスコの喜びと共通することだったことを後に知り、サレジアン・シスターらしい一面だったと懐かしく思い出してい

ます。

歴史によると、ドン・ボスコは一八六四年にサレジアン・シスターズの創立者となるマリア・ドメニカ・マザレロという少女に会っています。

一八六六年、ドン・ボスコは、少女教育を目的とする女子修道会を建てたいと、未来の枢機卿カリエロと一八七一年、四度目のローマ旅行のとき教皇ピオ九世にもその事を話したところ「その考えは、神の声でしょう。たくさんの霊魂が、そのために救われるでしょう」と意見をいただいた。…そのときから十年前の一八六一年、ドン・ボスコは、アクイの町から、アレッサンドリアを通ってトリノに向かう汽車でモルネーゼという村に住んでいるペスタリーノ神父を知る。彼は、小教区の奉仕に当たらせることを目的に、一八五六年に設立された一つの姉妹会「無原罪の聖母の女子信心会」を指導していました。この活動に参加していた一人の娘が、当時流行したチフス患者を看護して自分も感染してしまいました。幸いに全快したこの娘は一八六一年、友人に「私たちは、毎日、畑ばかり耕していられないの。仕立て屋の仕事を習わない。そして村の少女たちに何かを教え、同時に神様に奉仕できるような、そういう仕事をしたいと思わない」と語りました。少女の名前はマリア・マザレロ

を覚えていました。他の友人も加わり、村の赤ちゃんや子どもを引き受けて教育することもは

じめていました。マリア・マザレロは当時二四歳でした。ドン・ボスコは、この六四年、六七年、六九年、七〇年に訪れています。七一年サレジオ会の幹部を集め、女子修道会構想を発表し、翌七二年一月二九日のサレジオの聖フランシスコの祝日に選ばれ、ドン・ボスコの聖フランシスコの祝日に選ばれ、ドン・ボスコは、「キリスト信者の助けとなる聖マリアの修道会」と新たな名前を発表しました。(*)

これが星美学園、その後、日曜学校、寄宿舎、孤児院、幼稚園、私立学校、養老院等を設立、マリアのルーツで、その後、日曜学校、寄宿舎、孤児院、幼稚園、私立学校、病院

れたため、目黒通りを渡った小林君の家の近くに間借りをされていたように記憶しています。

戦後の大変な中から星美学園の分校が目黒にできたわけですが、二学年からは新しい校舎での授業となりました。二人掛けの机に男女が並んで座る男女混合クラスで、私の隣は帯屋（吉野）洋子さんでした。カトリック信者同士だったこともあり、四月一日のエイプリル・フール（復活祭）に当たった日曜日に、担任の藤田（楚良）叔子先生が下宿に招待してくださいました。隣の部屋には丸岡先生もおられて、その後何年かイースターの恒例行事になりました。藤田先生は、私が五年生になった時に田園調布雙葉小学校に移られ、同時に丸岡先生も、帯屋洋子さんも雙葉に行かれました。後に藤田先生がご結婚をされ、お子様の洗礼の代父を頼まれたことがあります。また、会社の同好会で謡曲を習っていた時、私の師匠と楚良（藤田）先生とが謡曲仲間だったことから、渋谷の松濤にある能楽堂でお会いしたことがあります。

さて、新しい校舎の二階の修道院の横にお聖堂がありました。その上の三階が図工室で広い教室でした。担任の藤田先生には習字やレリーフの手ほどきをしていただき、コンクールに応募し賞をいただくチャンスも作っていただきました。特に、画家ルオーの作品を紙粘土で描き、水彩絵の具で色をつけ、さらにラッカーで光沢をつけるレリーフは子供心を刺激され無心になって「ヴェロニカ」や、「キリストの十字架」を手がけました。「キリストの十字架」は大掛かりな作品で湖東信男君と加瀬川憲道君と共同で製作しましたが、校長様がよく訪ねてくださり

励ましていただきました。渋谷の東横百貨店(現東急デパート)の階段をギャラリーにした〝星美学園レリーフ展〟も学校のPRになったと思います。

三年生になったとき我が家に当時としては珍しいテレビがつきました。NHKのイタリア歌劇中継を鑑賞なさるため、ダルフィオール神父様、チマッチ神父様等とともにお越しいただいたことがありました。

校庭に鳥小屋があり、お世話係のシスター・バルバラから十姉妹をいただきました。シスター・バルバラはその後異動されましたが一一年後に韓国で再会しました。私が早稲田大学に入学した年、探検部の合宿で韓国に行きました。ソウル滞在の合間を縫って郊外のサレジオ会修道院を訪ねたとき玄関で出迎えて下さった方が偶然にもシスター・バルバラでした。真夏で太陽が日本の倍に見えるほど暑い時でしたが、応接室で出していただいた冷たいレモネードの味が忘れられません。

松下電器に入社し、大阪勤務になったとき、森之宮のカテドラルの近くにある城星学園を訪ねたことがあります。シスター・テレジーナ笹田校長様に優しく迎えていただき、コロンビアマリーナにも久しぶりにお会いできました。

想い出はつきません……。

一昨年、樋泉史彦同窓会長から連絡をいただき、シスター・アンジョリーナ・バローネ校長

様の病気回復を祈念するごミサにあずかりました。新しくなった母校のチャペルで酒井神父様司式のごミサでごミサさせていただきましたが、四八年前の小学校入学当時と同じように侍者を務めさせていただきました。谷合（駒野）かほるさんにご尽力いただき、懐かしい方にお会いできました。

慈愛に満ちたシスター方に感謝して支援するための基金としてアンジョリーナ会もできました。ナ・バローネ校長様、卒寿（九十歳のお誕生日）おめでとうございます。心からお祝い申し上げるとともに感謝申し上げます。

二〇〇四年五月、サレジオ教会の献堂五〇年記念式典が行われました。碑文谷で生まれ育った友情の輪が、時代を超えて、幾重にも幾重にも広がっています。

仕事上世界に旅する機会が多くあり、彼の地で教会の塔を見つけては訪ねて行ってしばし祈りの時間を持ちました。六〇歳定年まであと残り数年ですが、企業に勤めながら大学で講義を持って四年になります。実業の世界を離れても教育の世界で校長様の意思を受け継ぎ少しでも世の中のお役に立ちたいと考えています。

改めて感謝申し上げるとともに、病気ご回復を心からお祈り申し上げます。

（＊）『ドン・ボスコの生涯』（A・オフレー著、F・バルバロ訳、ドン・ボスコ社、2024）から

書き残しておきたいこと

一期〇作田忠司

あなたの一生を決定づけた出会いを挙げて下さいと問われたとすると、私はためらいなく《キリスト教》と《音楽》であると断言したうえ、その源泉が目黒星美の小学校時代であることも正直に告白しようと思う。ここを出発点にして今の自分があるのだし、以後の私の半生の苦労や錯誤、そしてよろこびもまたここに端を発しているのだから。

典型的な都市型の平凡なサラリーマン家庭に生まれた私に、キリスト教のかった。それがなか、そのカトリック教育の成果なのか、サレジオ中学に進学した直後、私は突然受洗した。家族は青天の霹靂だったろうし、学校関係者は当然の帰結とみていたのかもしれない。しかしその受洗をめぐる個人的な事情は、やがてその成りゆき以上の意味を私のそれからの人生に作用していくことになる。

私の受洗の後、母弟妹と立て続けに教会に通い始め、我が家は立派な(!)カトリック家庭に変貌をとげていくのだが、家族そろってのこの改宗は、みながキリスト教の真理に目覚めたのでも、熟慮の末に信仰を選び取ったのでも、もちろんなかった。

では私たちは、私は、なぜカトリックになったのだろうか。

あの時代、小学校生であった昭和三〇年代は、日本の戦後史の中でもとても意味合いの強い

時代ではなかったと思っている。そこには敗戦を経て、ようやく高度成長に向かいつつある、懸命に生きていた時代の人々の熱気があった。

初めてのテレビや電気冷蔵庫の出現の時代、母親が愛読していた『暮らしの手帖』に描かれた近代的生活へのあこがれ……当時の我が家はきっとその延長上に「教会」の姿を思い描いていたのではなかっただろうか。まるでアメリカの五〇年代のホームドラマに出てきそうな風景や気分をみなが憧れ共有したいと願っていた。東京目黒という地の利から、多くの中産階級が集う新設のカトリック系私立小学校としてのイメージや気分のなか、こうした時代に同調しながら私たちは生きていたように思える。戦争には負けはしたが、みなで懸命に生きる日本の将来が、天真爛漫な外国のシスターたちと神父さまの姿にダブって見ることができた時代だったのだ。

開校直後から実に高校時代まで、そこにはのちに「団塊の世代」といわれる私たちにも稀有な、小所帯でまるで家族のような健康な学園がそこには確かにあった。まだ進学校でもなかったし、伸び伸びと子どもらは羽根をひろげて遊びまわっていた。

なかでもシスターネ校長の、とびきりの笑顔と明るさを私は決して忘れることができない。「私の坊や！」と呼びかけてはしばしば抱擁し、時に接吻を繰り返したこの太っちょのシスター。いったいこの西洋のおばさんはどうなっちゃっているの！　と子どもながらに戸惑いながら、その熱烈な掛け値なしの愛情表現に、みな度肝を抜かれていた。

抱きしめてくれた校長様のマシュマロのように柔らかいおなかの、なんと心地よかったことか。そこには現在ではすでに失われてしまっているだろう、子どもと先生の人間としての確かな愛情交換があった。それが日黒星美の美質ではなかったかと思うし、またこれがならではのカトリック信仰の人間的な発露、感情表現なのかもしれないと確信している。

しかし、私の受洗に至る過程には、こうした社会や時代、恵まれた環境とは別な内面の悩みがあった。

小学校時代の私はチマッティ神父のオペレッタの出演により目立つ存在になっていたり劇場で公演をしたりラジオに出演するなど、それにオペレッタを感情移入しながら、まるでイタリア人の子どものように歌い続けていた。それは当時の私の内心のもやもやを、打ち消すこととなどできそうにもなかった。

小学生時代、歌を歌っている以外、私は周囲をボーッと眺めて過ごしていた。勉強もできる子ではなかったし、吃音癖もあり（ども りの歌上手！）特に高学年になってからは鬱屈とした気分に浸ってもいた。そして考えていることといえば「なんとしてもイタリアに行かなくてはいけない！　それがシスターや神父さまに愛されなくてはいけない！　喜んでもらわなくては僕の恩返しなん

だから！」というもので、それには子どもなりの確信にも似た決意があったのだ。

私は多分（としかいいようがないのだが、今になっても老母に問いただすことができないでいる）何年生かから学校では歌でしかお返しのできないものととらえられ、その理由から、学校の授業料を全く払っていなかったのだ。在学途中での父の失職や母親の病気などの理由から、授業料免除の特権を受けていた。

そして、そうした事実によって、まさにドン・ボスコの精神にとらえられ、その結果がいうした負い目は、その頃の私にとって、私は不愉快な思いをしたり理不尽な扱いを受けたこともちろん、こうした子どもになることだと思っていたのだ。

とは皆無なのだが、それにしてもこれらの事実はえらく厳しいブローになって私の子ども時代にのしかかっていた。

その最終的な結論が、成り行きに任せて受洗をした私の事情なのである（しかし思い返してみると、そこには成り行きとは別に、子どもなりの内面の葛藤やら苦悩が生きていたのだといえなくもない）。

《キリスト教》と《音楽》。だからこのふたつは私にとって切り離すことができない個人的なつながりを持っていたのだといえる。

現在の仕事もクラシック音楽業界であるし、縁あってチマッティ神父のオペラを復刻し日本の音楽界に紹介したりもしているのだが、いってみればいまだ私は《目黒星美のバリアー》の

なかでもがき、よろこび、生きているのかも知れない。そしてそれは一生続くのだと思う。
これほどに小学校時代の心性は、人を生涯縛りつけることになるのだということを、ぜひとも書き残しておきたかった。特に、現在は一期生など手のとどかないほど進化し名門校としている目黒星美の現役の諸先生方にも伝えておきたく、拙文を記す次第である。心から感謝しています。

かけがえのない時代

一期〇杉本 進

わたしの人生における異文化との遭遇はサレジオ幼稚園でのダルフィオルった。駆け寄っていくと大きな手ですくうようにして持ち上げられ、高く高た。大きな鼻、金髪に近い髪色の記憶がある。日本人とは明らかに異なる日ション。碧眼、そして体臭。本語のイントネー

二〇代のころから、海外へ行っても臆することなくその国の人々と交流ができたのは、この小さくしての異文化体験がものをいっていると考えている。

しかしその異文化とはうつらなかったようだ。なにも身構

えることなく、なにひとつ、考えたうえで対応したわけではなかった。すべてが自然で当たり前の行動だったのだ。

小学校へ進むと、シスター・アンジョリーナ・バローネというシスターが校長様であると紹介された。七歳を前にした春であった。年端もいかぬ子どもであったが、「校長」に「様」をつけて呼ぶことにはいささか違和感をもった記憶がある。それまで耳に入ってきていた「校長」の下は「先生」であったからだ。

記憶が違っていなければたしか、サレジオ幼稚園の一室を借りての入学式で、雨が降ったじめじめとして蒸し暑い日ではなかったか。

登校第一日目――ではなく、入学式後だったか。教室に入り、決められた席に着席した。一年A組。

担任はシスター・テレジーナだった。テレジーナは満面に笑みをうかべ、明日からの学校生活の心構えを生徒たちに述べられた。教室の最後部には付き添いの母親たちがズラリと並び、わが子の知力の発展を願う優しいまなざしで、子どもと一緒に担任の話に耳を傾けた。

「いいですかあ、あしたからはがっこうにひとりでくるんですよお。そして、おめめからあめをふらせないようにねえ。やくそくできますかあ」

とシスター・テレジーナは、やさしく、どの子にもわかるようにひら仮名で語りかけた。

わたしはこの言葉をしっかり受け止めた。もう幼稚園の園児ではない。小学生だ。よし、明日からはひとりで来よう。わたしは、どんな困難も乗り越えてひとりで来る決意を固めた。わたしの小さな身体は興奮で打ち震えた。しかし……。

次の日、学校に来てみるとかなりの数の生徒が母親と同伴だった。なーんだ、約束が違うじゃないか。アタマに来た。昨日の話はどうなったのか——わたしの憤慨の気持ちは、その後長くつづくのだ。

しかし、よく考えてみればわかるのだが、わたしはそれ以前サレジオ幼稚園に通っていたんですよね。ひとりで来ることができるのは当たり前で、定期券を使って遠くから初めて通学するもには無理な話でした。

○

ふくよかな校長様はいつもニコニコと微笑んでおられ、そのそばにはいつもこれまた笑顔のシスター・テレジーナがおられた——この姿が目黒星美学園小学校揺籃期からのもうひとつの風景となってしまうおふたりそして最後にはわれわれの心の姿だ。

幼稚園の間借り教室をあとにして新校舎へ移ったとき、校庭の隅に奇妙な「装置」が備え付けられているのを覚えている。ハントウボウというのだという。竹の棒にからみついて、ただ

ただ力ずくでテッペンまで登り、あとは滑り降りて汗をかくというだけの、なんの面白みのない「装置」には目もくれず、わたしはもっぱら三角ベースやドッチ・ボールにいそしんだ。

そうやって放課後にひと汗かいていたある日の夕刻、校庭で帰り支度をするわれわれ数人のところにおふたりが近寄ってこられ、それぞれの帰る方向を聞かれた……ように思う（なんせ遠い昔のことなので）。幸いおふたりが出かけられる方向と、われわれの帰る方向が一緒だったためにふたりのシスターとガキどもとは奇妙な一団となって移動し始めた。それぞれの家の方向を考え合わせると、ガキどもとは、五十嵐洋夫君、星野人史君、飯島健三郎君、そしてわたしなどではなかったかと思う。

みんな校長様とシスター・テレジーナが大好きだった。言葉をかけてもらうだけで幸せだったように思う。一緒に歩くだけでも楽しかった。そして会うときはいつも笑っていたから――とわたしが理解したのは、成長して、多くの罪を重ねたあとのことだった。

小学校正門から出た集団は、サレジオ教会の、その当時存在していた司祭館横の大きな鉄柵の門から入って円融寺方向の小門をめざしてグラウンドを突っ切り、大きなドブ川を渡って、畑の間に伸びた砂利の道を行き、円融寺を右手に見やって一路東へ。旅路はるかに延びて目黒区を脱出、目蒲線武蔵小山駅近く、品川区の荏原という地区にある小さな役所へと辿り着い

た。当時は、校長様とシスター・テレジーナがなんでこんなところに来るのだろうといぶかしがったものだが、いま考えると小学校建設の一貫としてなんらかの許可申請などをしに、一時間以上かけて行かれたのに違いない。

○

子どものころは当たり前だと思っていたことが多々ある。

人を愛すること、他人を思いやること、嘘をつかないこと、社会に出てみると当たり前ではないことがあってはいけない、陰日なたがあってはいけないろいろと人間形成にあたっての大切な教えを子どものころ目黒星美で受けた。

ながい間、そういうことは当たり前のことで、世の中のだれもが身につけているものと思っていた。しかし社会に出てみると、かならずしもそうではないことを知ってこうなっているのかと思ったことを覚えている。日本の世の中は

目黒星美学園小学校の六年の間に、校長様やシスター・テレジーナ、そのほか諸先生方によってわれわれ一期生の心には、何かが刻印されたと自覚できる何かが残っているのだ。知育教育だけによっては得られないかけがえのない何かだ。それは五七歳になったいまでもあのとき刻印されたと自覚できる何かだ。

六年間毎日、星美に通うことがいやだと思った大事な何かが。人間形成に影響を与えたかけがえのない何かだ。いや、学校へは一日もありませんでした。

行くことが楽しくてしょうがなかったことを覚えています。

シスター・アンジョリーナ・バローネ校長様、シスター・テレジーナ、シスター・ジョゼッピーナ、藤田先生、横尾先生、諸先生方ありがとうございました。経済的に苦しいにもかかわらず星美学園に通わせてくれた両親に感謝いたします。ありがとうございました。

われわれが次になすべきことは、星美で受けた愛のすばらしさを次代に伝えていくことではないでしょうか。

小さな学園からのスタート

一期〇張(旧姓 小笠原)たみよ

戦後のベビーブーム、一クラス五〇人程、七、八クラスもあった時代、少人数の学校は少なく、まして、入学した学校は校舎もでき上がってなく、両親はどの様な考えをもって先の不安もなく入学させたのかと……後になって、星美を卒業し大学、結婚、子を持ち、子をそれぞれの時、両親の選択は間違いはなかったと、星美の教育を受けたことに喜びを感じます。それは、シスター・アンジョリーナ校長様、シスター・テレジーナ笹田、諸先生方がお心豊かな子どもの成長を築き上げるドン・ボスコ教育の努力をされ、献身的に教育に携わっていたか

らです。

昭和二九年に入学、サレジオ幼稚園の仮校舎からのスタートでしたが園服から男も、ダルフィオル神父様、シスター・アンジわっただけで慣れた園舎を自由に動き回り、いつヨリーナ校長様のやさしい眼差し、大きく広げたでいったものです。通学途中の小学校の生徒から、頭の先から足の先まで黒い制服に変「カラス」と言われたことがありましたが、ヨーロッパスタイルの制服だと聞かされていたので、結構、気どって通学していたと思います。特に行事の時は大きな白いリボンと白い手袋をタリア語の歌は、今でも「アンジョレット」と口ずさみたくなる歌です。リーナ校長様のお祝で、何度も練習をしたイ思い出します。一〇月二日のシスター・アンジョ

また、小学校の修学旅行は京都で、舞妓さんの舞う姿を見た時の驚き、オペレッタ、デパートでのレリーフ展、いろいろと心に残る小学校の経験。中学に入学した時もいつも工事の作業の音を聞きながらの授業、校庭は草ボウボウで、草むしりから始まるグランドづくり、そんな中でも、シスター・アンジョリーナ校長様、シスター・テレジーナ笹田は役所廻りに奮闘しておられました。一つ一つ大事に築き上げられた学園を、私たちは忘れることができません。

「いつも祈っていて下さい」が、お出かけになる時の言葉で、神の大きな愛と、祈りの中で私たちの学園が存在します。私の二人の子どもも学園を卒業し、心豊かな教育を受けることがで

きました。悲惨な事件が多い今の社会の中で、どんな環境であれ、学園の教育方針の「愛」「信頼」「やさしさ」「奉仕」の心にあると信じ、忍耐深く、献身的に多くの愛を下さったシスター・アンジョリーナ校長様、シスター・テレジーナ笹田に感謝の祈りを捧げます。

校長様からうかがったこと

一期〇樋泉史彦

今回、シスター・アンジョリーナが九〇歳のお誕生日を迎えられることを記念して、「目黒星美学園物語」の出版を五期生有志の方々が中心となって企画されたこと、そして、多くの卒業生が協力されていることを知り、改めてシスター・アンジョリーナをはじめとする学校設立時の諸先生方の存在がいかに大きなものだったかを実感しています。

目黒星美で過ごした六年間が、それ以降の学校生活と違うと私が感じたのは大学生の時でした。中学、高校、大学での先生方は職業としての教育者であり、その義務として教育に携わっている感じだったのに対し、小学校の先生方、特にシスター方は親が子どもに接するような感じで、本当に愛情をもって教育していただいたのだということに気が付いたのです。

恐らく、この本の出版に関わられた方々、そしれているのではないかと思います。

では、なぜそのような教育が可能だったのかたったお話が参考になるかもしれません。

シスター・アンジョリーナが少女時代を過ごにあるピアッザ・スタトゥートの側で、ドン・ボスコが設立し起居してた工業一〇分ぐらいのところです。

学校の側には、扶助者聖母会の旧本部などもあります。

シスター・アンジョリーナを大変シスター・アンジョリーナのおばあさまはシスター・アンジョリーナもおばあさまのことが大好きだったとのことです。

それだけに、代半ばで修道会への入会を志さまが猛反対され、信仰の道に進みたいという気持ちと、おばあさまを悲しませたくないという気持ちの板挟みで大変悩まれることになってしまいました。

ところが、ある朝のこと、おばあさまがシスター・アンジョリーナに修道会を認めてもられました。聞けば、前の晩、おばあさまの夢のなかにドン・ボスコが現れ、良いとおっしゃられたとのことでした。孫娘の修道会入会を認めてあげなさいとお話し

その結果、シスター・アンジョリーナは修道会に入会することができました。

修道会に入られた後、シスター・アンジョリーナは宣教を志願されます。

今から六〇年以上も前、ヨーロッパと日本の間が船旅で一カ月以上かかっていた当時、宣教のためイタリア国外にでることは、家族や故郷とも一生の別れになる可能性があります。

それでもなお、宣教を志された信仰とおばあさまから受け継がれたドン・ボスコへの強い畏敬の念が、日頃シスター・アンジョリーナがおっしゃっておられる「星の子どもたちは、皆、私の子どもたち」と言うお気持ちが同じ宣教女の方々や、ともに苦労をされた日本人のシスターと先生方にあったからこそ、私たちも子ども心に何かを感じとったのではないかと考えています。

「グリージョ」のこと

四期〇伊東明子

昔、御修院で「グリージョ」という犬を飼っていた。名前の由来はイタリア語で灰色のという形容詞の男性形。雑種であったが利口でおとなしく、アンジョリーナ校長様をはじめシスター方、生徒も皆「グリージョ、グリージョ」と可愛がっていた。

私が中二の時だったと思う。シスター・セリーナの現国の授業前、犬好きのクラスメートがグリージョを呼び寄せて教室内に入れた。そして伏せの姿勢のまま後方の座席の下に隠した。授業のベルに続いてシスターが現れ授業が始まった。私たちは皆グリージョのことを黙っていた。おとなしい犬なので授業終了まで静かにしているだろうと信じていたのだ。

シスターが黒板に向かって書き始めた時、突然「ワン」という声が響いた。私たちはグリージョを追い出すことが嫌だったので黙っていた。なんとかごまかしている間に授業が終了してほしいと願っていた。

ところがグリージョは伏せの姿勢に我慢できずに立ち上がり、クラスメートの止める手を振り払い、「ワンワン」とヒステリックに叫んだ。物静かなシスターは血相を変えて「早く犬を外に出しなさい」とヒステリックに叫んだ。物静かなシスターが豹変しているので私たちは愉快になってくる。まるでアメリカ映画のコメディーを見ているようだ。クラス中からクスクス笑い声が起こり、どんどんエスカレートしていく。シスター対グリージョのタイトルマッチだ。授業どころではない。皆興奮して事態を見守っている。

かわいそうなのはグリージョである。生徒たちに拉致され室内に閉じ込められたうえ、シスターから恐ろしい目で睨まれ、すっかり悪者にされてしまった。早く自由になりたい一心で黒板に向かって突進する。シスターはわめく。私たちは手をたたき、キャーキャーさわぐ。

ほどなくグリージョは広い校庭に解き放たれた。
と言わんばかりに遠くへ走って行った。
結局この騒動で授業しないうちに終業ベルが鳴った。
卒業して三〇年以上の歳月がたった今でも私は、この時のことを思い出すと愉快になり笑いが込み上げてくる。区立の小学校から星美の中学に進学した私は、星美の小学校からのクラスメートになじめず孤独だった。しかしこの一件から星美の雰囲気にとけこめた気がする。
私たち生徒は幸せであった。このようないたずらを咎める先生方は一人もおられなかった。これはひとえに生徒を我が子のように慈しんでおられたアンジョリーナ校長様の下に先生方が一致団結してされたことだろう。こうしたユーモアの精神が、どれほど私たちの学校生活を明るく楽しくしたことだろう。
アンジョリーナ校長様、グリージョの思い出がどんなに深く私と星美学園を結びつけているか、きっと想像できないでしょう。アンジョリーナ校長様とグリージョの銅像を校庭のかたすみに建てたいくらいですから。」

百合の香りに包まれて

五期〇麻生マユ

五月二四日の「扶助者聖母の祝日」が近づくと、学園内は百合の花の香りで満ちあふれ、私たちはクラスごとに積み重ねてきた徳の花の捧げ物を趣向を凝らして作った。鮮やかな新緑の色と明るい日差しに包まれた時間と空間がそこにあった。校舎も教室も廊下も綺麗であった。聖母行列の日に私たちが一本ずつ手に持つ鉄砲百合の花が束ねて生けてある場所に近づけば、頭の芯まで染み込んでくるようなむせかえるほどの香りである。いつも私はあの香りに包まれた時、「西洋の香り！」と思ったものだ。

今のように外国との往来がまだまだ日常化していない時代であったが、我が家は、父が戦前に洋行し「イタリア紀行」を書いているし、伯父がローマに長く留学していたこともあってイタリアは常に親しみの深い国であった。それでもやはり、あの香りは私を西洋へ誘う香りであった。

父は「西洋を知るにはその宗教を知らなければ理解できない」と言い、哲学や芸術や思想の基にあるキリスト教を学ぶことを勧め、私は目黒星美学園を受験したが、父は親子面接でお会いしたアンジョリーナ校長様に感銘し、私が入学したことを喜んでくれた。

アンジョリーナ校長様の存在はとても大きかった。その深い暖かいまなざしで、私たち一人

一人と正面から向き合って下さり、一人一人を信じて育てて下さった。

アンジョリーナ校長様は第二次世界大戦中に日本に来られたとお聞きしていた。鼻の息で布団が凍ってしまうほどの寒さの厳しい所で、食料も少なく栄養を補うためにお話は学生の時にうかがっていた。美ホームで戦争孤児たちを育てられていた頃の校長様とシスターたちが、煎った大豆を少量、袋に入れて、それをなめながら山越えをして牛を買いに行かれ、その牛の乳を子どもたちに与えられた。そんな御苦労をイタリアとは全く環境の異なる日本の地でなさりながら、子どもたちを大切に暖かく育てられたことを思い出す。

その後、日黒星美学園小学校を立ち上げられ、中学校、高等学校へと展開していく。

戦後日本は今までの軍国主義から一転して、アメリカ追従の自由主義ふうな国に変わっていくが、産業や経済が成長していくなかで、教育は、競争意識を煽る傾向が強くなり、画一的になってくる。そんなかで、日黒星美学園内にあった空気は、隣人を思いやる心であり、愛する心であったように思う。

私は中学から日黒星美学園で過ごした。その時には現実社会との距離を感じることもあり、先生方と話し合いの場を設けたりしたこともあったが、それはその時代（一九七〇年頃）の中では若者たちの当然の思いであったし、そのような行動をさせてくれた自由さも学園内にはあった。そして先生方には私た

ちの思いを少なからず理解していただけたし、シスター・テレジーナ笹田をはじめシスター方も、私たちが発したメッセージに自然に対応してくださったと述懐している。目黒星美学園に

は、いつも笑顔があり、楽しげな友人たちの声があった。

現代の日本の教育現場では、今まで考えもしなかった事件が相次いで起こってしまっている。あふれる情報の中で、常に変化するものを追いかけ、ふりまわされていく。

けの応酬、バーチャルな世界に片寄り過ぎると、使わなくなった脳の一部が退化してしまうということを聞いたことがある。「人間は人間によって人間になる」という、ドン・ボスコの教育の原則は、今日の日本の教育に最も必要なことなのである。

合って育つという感情のない言葉だはないかと実感する。

二一世紀に入ってにわかに起こってきた価値観の変質というより喪失は、まい、あらゆることに不確かさだけが残されていうことに対する意識が薄い日本において、そのことが顕著である。いずれにその基にカトリック神学があると否定しようと、西洋社会とは明確に異なっていることに、はやく気がつかねばならない。

アンジョリーナ校長様が、私たちにお示し下さった、暖かいまなざしの奥にある深い愛の心と、ゆるぎない信仰の御心、そしてその確固たる価値観に支えられた教育は、今本当に必要な

ことは何なのかを教えてくれるように思われる。私はそれを私自身の財産として、大学や短大で教員として学生たちと接する時に思い出し、一人一人の学生たちが持っている優れた面をのばし、足りない面を補いつつ、自信を持って卒業していけるように努めていける。

庭に咲いた百合の花を生けて、その香りに包まれながらこの文章を書いている。なつかしい星美の日々と現実の日々を往復しながら。

無題

二〇〇三年の十一月、私の所に一本の電話が入った。ルーネ元校長様の為に、その日本での足跡と偉業を本という形で残そうという企画の話だった。何か少しでもお役に立てればと思い参加させていただくことにした。

編集会議を重ねるなかで、昔の色々な記憶が蘇ってきた。私が星美学園に入学した頃はまだ最高学年が五年生であったと思う。

何もかもが進行形であり、だからこそ、父母や子どもたち、先生方、シスター方が皆で心を合わせて学校作りに一生懸命だったのだと思う。それぞれの父母が自分たちにできるお手伝い

をかっててとても温かい雰囲気のなか、私たちは学校生活を送ることができた
今回何人かのお母様方と原稿依頼の件で、お話をさせていただいたが、とても
ぎてきた長い年月を改めて感じさせられた。
二〇〇四年に入ってから本格的に活動が始まり、色々な方々にお世話になりな
でくることができた。
結果的にたいしてお役にたてなかったことが心残りであるが、この本の制作に
ができて幸いであったと思う。

無題

五期〇遠藤（旧姓岩城）喬子

日々の雑事に追われ、何十年も前の星美のことを忘れかけていた今日この頃、ご縁があり、麻生さんのお手伝いをさせていただき、懐かしく、過いたします。アンジョリーナ校長様のこと、お世話になった先生のこと、お友だちのことなど……。また、父母たちの校長様に対する思い、星美に対する思いなど、当時のことが、「あーそうだったのか」と今さらながら、理解できたような気でよくわからなかったことが、

がいたしました。この本が多くの方々に読まれ、皆様に伝われば、と言う思いで一杯です。最後に、大した尽力もできず、ここまでしまったことを編集に携わった皆様にお詫び申し上げます。色々有難うございました。

アンジョリーナ校長様への想い

五期○落合(旧姓小松)乃里子

小さき花の幼稚園から「日黒星美学園という新しい学校へ行きませんか」と提案された私の両親は「どう思うか」と私に聞いてくれました。私は「シスターのいる学校に行きたい」と答えたそうです。五歳のこの記憶は私には全くありませんが、目に見えない導きでアンジョリーナ校長様と出会いました。星美でのアンジョリーナ校長様を思い出すと心に暖かいものが流れます。校長様の笑顔にえくぼがあったと記憶しています。

私は家に帰り頬を引っ込ませ、「どうしたら校長様のお顔に近づけられるかしら」と鏡に向かったことを思い出します。暖かい手で肩を抱いたり、抱きしめたりして下さいました。昨今親子の交流にスキンシップが大切だといろいろなところでいわれていますが、私は星美でたくさんの愛を受けました。

亡くなられた上智大学の教会法学者安井光雄神父様の書かれた『今日の教会法』に記されていますが「修道会員は貞潔、清貧、従順の三誓願を宣言して、神に全面的に身を必然的に含む福音的勧告の下さったことを思い、同じ女性として尊敬致しこのような高い信念をもたれるマタイによる福音書一三章「種を蒔く人」に良い土地となり大きく実りつつあります。校長様はこれからの時代を担う多くの子どもたちが育っていくと思います。私は改めてアンジョリーナ校長様が創設された日黒星美学園に学べたことを感謝します。

無題

五期○クリスティン・マーティン美雪

「光陰、矢の如し」と申しますが、本当に昨日のことのような小学校時代。思い出すお御堂のお香、「振り香」(祝詞のような)、アンジョリーナ校長様の色白でポッチャリなお手、ダルフィオル神父様のお声の香りや音、ラテン語のお祈り、校庭の聖母マリア像、池、廊下、ステップの低い階段、などなど。本格的イタリアン・トマトソースの作り方、白いリボ

ン、手袋、など。たまに夢をみると出てきます。

ラ・マンマ

五期〇香山(旧姓末松)万里恵

小学校入学の日、両手を広げて迎え入れて下さったシスター・アンジョリーナ・バローネ。あれから四十年以上経った今でも、大好きな「私の校長様」です。

校長様から笑いかけられただけで温かいものに包まれ、威厳に満ちた眼差しを向けられると心の中まで見透かされている気がしたものでした。そして、厚みのある手で頬を撫でられたときの、くすぐったいような幸福感……。生徒一人一人が、「自分は校長様から愛されている」と、幼心にも感じとっていた気がします。その校長様の悲しそうなお顔を、だが私は、一度だけ見た記憶があります。

それは中学時代の山中湖林間学校でのこと。ドンなきっかけだったか、終戦前後の話になりました。アンジョリーナ校長様は、星美ホームの子どもたちと過ごした苦難の時期を淡々と語られていましたが、一人の少女のことに話が及ぶと、声を詰まらせられました。当時、ホームの子どもたちに食べさせる食糧の調達は困難を極め、栄養失調になった一人の少女が、やがて

わずかな食べ物すら受けつけなくなって、亡くなったのだそうです。遠くを見つめながらその話をされる校長様のお顔には、苦痛に耐えるような、深い哀しみが浮かんでいました。

山中湖林間学校には、他にも思い出がありますが。

夜、湖畔でのキャンプ・ファイアーの時、私たち生徒は必ず、アンジョリーナ校長様に「ラ・マンマ」の独唱をおねだりしました。

校長様はにこにこしながら、ふっくらした胸にひと息、夏の夜気を吸い込むと静かに歌い出されます。足元にひたひたと波が打ち寄せ、消えかかったキャンプ・ファイアーが時折思い出したようにはぜるなか、イタリア語の澄んだ歌声がながれて行きます。山中湖はなぜか流れ星が多く、湖を背に立つ校長様の後ろを、すうっと星が横切ったりします。歌がクライマックスに差しかかり、校長様の声が「マァンマ、」と一際高く響くと、皆、なんとなくしんみりして、かすかなホーム・シックにとらわれたりするのでした。

けれども、メンバーにじませていたのは、誰よりも校長様だったのかも知れません。神に与えられた使命をひたむきに遂行されていた校長様も、若くして離れた故郷トリノやご家族を、懐かしく、あるいはせつなく思い返される瞬間が、幾度もあったに違いありません。

三年前の秋、数人の同級生と共に、調布に暮らす校長様をお訪ねしました。校長様は、シス

ター笹田とともに、玄関で出迎えてくださいました。昔と変わらぬ笑顔――で、暢だった日本語も、そして自ら私たちに教えてくださった英語も、校長様の中け落ちていました。お口から出るのはほとんどがイタリア語、はるか昔に去っす。それでも我々の来訪を心から喜んで下さるご様子に、私はいっそう胸を熱く苦労をともにされたシスター笹田がその時も……。ていらしたことに校長様を励まし、その手をしっ

私は、ほんの子どもの頃に、アンジョリーナ校長様という「心から信頼できるえたこと、宝石のような数々の思い出を持てたことを、幸せに感じています。アンジョリーナ・バローネ校長様、かなうならばあの澄み切った歌声を、どうかもう一度、私たちに聞かせてください。

無題

高校を卒業して、年末年始の挨拶以外あまり連絡をとっていなかった同期生の麻生マユさんから「アンジョリーナ・バローネの為に本を作りたい」との電話が、突然ありました。素

第五期〇佐々木(旧姓杉本)かおる

晴らしい話だとお手伝いすることを気軽にOKしたものの専業主婦に近い生活をおくる私に、できることは雑事のみ。本を作るにあたって協力してくださる方をさがしたり、原稿のお願いの電話をかけたりなど。締め切りが近くなってきた頃は少し大変でした。しかし、懐かしい世田谷の星美に行くことができたり、なかなかお会いすることもない方とお話ししたり、何十年も会っていないのに昨日わかれたばかりの友達のように、「日黒星美学園物語」の為に、心を一つにできたことはすばらしいことでした。

アンジョリーナ・バローネ校長様の思い出

五期〇中下(旧姓　佐野)昌子

校長様を想う時、まず一枚の古い写真が目に浮かぶ。それは私が日黒星美学園小学校の一年生になった時のお教室での一葉である。黒板の前に立たれた校長様がニコニコと満面の笑顔、私たちは思い思いの白いリボンを髪に飾った後姿である。ふくよかで温かな体型をしていらっしゃる、その御手も肉厚で大きくてまさに包容力、その感触が今でも私の手に甦る。小学校の時は何かの行事、例えば五月の聖母行列の時など、髪が長かった私はポニーテールに白い幅広のタフタのリボンを母に結んでもらって坂道をスキップしながら星美へ通ったものだった。今、

自分が母親になって校長様、ダルフィオル神父様、まだお若い時に、あの時代に遠い極東の日本に私たち日本の子どもたちの教育の為にいらして、一生を捧げられるその信仰、勇気、情熱を思う時、そして彼等を送られたご家族のお気持ちを思う時、本当に目頭が熱くなる。

こんなエピソードをうかがった。先輩のご両親がお嬢様に良い教育を受けさせようと文部省に問い合わせたところ、我目黒星美学園を推薦されたという。きっと校長様が星美学園創立の為に奔走していらして文部省にも行かれていたものと思われる。なんとも誇らしく素敵なお話だと思う。

多分、私が小学校四年生位の時だったと思うが御ミサがサレジオ教会であり、生徒たちが並んで席に着こうとしていた。席はいっぱいになり座れないでいる下級生をご覧になった校長様が席を譲られ、ご自分はあの教会の冷たい石の床にずっとひざまずいていらしたのかと感激したのを覚えている。

夏の林間学校、私は小学校四年生から参加していた。三泊四日だったと思うが、最終日山中湖畔で夜、キャンプ・ファイヤーを囲んで、校長様が〝マンマ～～～〟と歌われた。今なら日帰りの距離だが、まだ小さかった私たちは両親と離れての三泊四日は一大事であり、そうでなくてもホームシック気味のところへ校長様が歌われて〝ママ～～～！！！〟と泣き出す始末。校長様、ダルフィオル神父様、素晴らしいお声を聞かせて下さったものである。

我目黒星美学園小学校は一年生から英語のクラスがあった。それも"Twinkle, twinkle little star～～～"と音から入る、生きた英語教育、クラスメイトには黒人も白人もアジア人もいて皆和気あいあい、お陰様で人種に対する偏見が大人になるまで皆無だった。私は縁あって結婚してアメリカに移住、そこでその人種の特異性、自国なまりの英語に触れてかえって異人種を意識したくらいであった。中学になってイソップ童話を英語で読むクラスを校長様が持っていらして、その授業中に校長様が「貴女は一生英語から離れてはいけません」というコメントをくださり、それが心の何処かにあって英語から一生離れない人生を歩むことになったのではと思えてならないのである。

ダルフィオル神父様のサレジオ幼稚園、サレジオ教会の塀につるバラが鼻の上にくっつける。神父様が教えてくださったおたまじゃくしがイタリアの国旗の色と同じとおっしゃってくれた緑、赤、白のマフラーをして遊びに行ったら神父様のオーバーコートの中にぐるっと子どもたち喜んでいらした。冬になると寒いので大きな神父様、いつもの大きなバターボールをくださった。ミッキーマウスの映画会、行事の前に必ずスクリーンに映し出される5、4、3、2、1の数字を大きな声で数えて騒いでいた、あのミッキーマウスの映写もクリスマスのサンタクロウスも神父様だった。

アメリカ在住の頃、日系銀行でお仕事をしていたのだが、駐在員が帰国の際奥様をわざわざオフィスまで連れていらして「東京に住んだらどうしても子どもをサレジオ幼稚園に入れたいのでOGであるあなたにお話を聞きたい」とおっしゃるので、私は「一番記憶に残っているのは、お昼休み、下校の合図はベルやチャイムではなくすべてクラシック音楽であったこと、例えばお昼寝の時は『サンサーンスの「白鳥」、下校の時はチャイコフスキーの「アンダンテカンタービレ』後にそれはサンサーンスの曲の題名を知るまで私はお昼寝の音楽だと思っていた」などというエピソードをお話しした。太陽が燦燦と降り注ぐ国、声楽の故郷イタリアからいらした神父様のコンセプトが生きていたのだと思う。サレジオも星美も神父様方、シスター方の大変なご努力が花開き結実しているからこそこうして「どうしても入園させたい」とおっしゃるご父兄がいらっしゃるのだと海の向こうから懐かしく、誇らしく、想いを馳せたものだった。

主人の日本駐在に伴って二〇〇一年九月から日本在住、その直後星美の親しい友人達に誘われて校長様、シスター・テレジーナを調布にお訪ねした。お昼過ぎにうかがったら、「貴女たち、お昼は？」とお訊ねになり、「すませて来ました」と答えると今度は川意しておっしゃって、おふたりは終始ニコニコと手をつないでいらっしゃった。本当なら私たちがお世話しなくてはいけないのに、校長様は五十路を過ぎ

たおばさんたちを未だに子ども扱いされている。ご一緒に写真を撮り、ハグをして、お送って下さった。うかがって本当によかったと、皆胸に去来したものは同じだったと思う。

最後に、実にイタリア的おおらかさで私たちは育ったのだ、と実感する。日黒星美学園という温床でヌクヌクと。マリア様をいただく学び舎、クローバー一面の校庭そして校長様はじめ愛を持って私たちに接して下さった恩師の方々、今も変わることのない友情、そしてそうした環境においてくれた両親にも心から感謝を捧げたい。

私の一生を左右した出会い

一三期〇小山(旧姓　磯貝)もとみ

私は一九八八年一二月にアメリカに移住し、現在南カリフォルニアのロサンジェルス郊外で、主人と息子二人と四人家族で暮らしています。大変ありがたいことに同期の皆さんが代わる代わる目黒星美学園からのお知らせや小冊子を送って下さるので、アンジョリーナ・バローネ校長様(私にとっては今もずっと校長様ですので)が九〇歳のお誕生日をお迎えになることを知りました。そしてその記念の本に、校長様との出会いを是非寄稿したいと思いました。

私たち一三期生は小学一年生の時にアンジョリーナ・バローネ校長様の英語の授業を受けました。思えば、現在の私があるのも、この産まれて初めての素敵な英語との出会いがあったからだと思います。校長様はその時、指人形を手にはめていらっしゃいました。そして、両手を後に回し、「ラランラララ～、ハーイ、マイネーム・イズ・デービッド」と出されました。「ララランラララア～、ハーイ、マイネーム・イズ・スージー」と男の子の指人形をはめた右手を前に出されました。校長様はその時の衝撃はとても大きく、瞬時に私をと女の子の指人形をはめた左手を出されました。四〇年近く経った今でも、当時窓側から二列目の席から見た、正面ではなく、校長様から向かって少し左側からのビジョンのまま、脳裏に焼き付いています。いうまでもなく、私はこの瞬間からアンジョリーナ・バローネ校長様の英語の授業を待ち焦がれるようになりました。

その後中二の時に「英語で仕事をしよう」と決心し、紆余曲折はありましたが、今まで英語人生を歩んで来ました。そして、とうとうアメリカ人（主人は日本人ですが、息子達は日系アメリカ人です）を産んで育てるまでになりました。

残念ながらアンジョリーナ・バローネ校長様の英語の授業は二年生以降なくなりました。でも、校長様はいつもニコニコ私たちを見守っていてくださいました。確か、小三の時だったと思いますが、校長様が校庭で生徒たちに囲まれていらっしゃいました。私もその輪の中にいた

のですが、私が校長様と目が合ったとき、ふと校長様が「貴女の目は本当に澄んできれいですね」とおっしゃいました。その時私がどれだけうれしかったか、今思い出すだけでも目頭が熱くなります。小一の時から校長様のファンでした。長様がまさに私の天使様になりました。

正直申しますと、私は卒業して以来日黒星美学園とも同級生たちとも疎遠な方でした。特に渡米してからは新たな環境で生活していくのに必死で過去を振り返る余裕はありませんでした。それが、数年前日本の同級生から連絡が来て、生たちと電話で話す機会がありました。

とても感動的だったのは、二〇年の空白を越えても、同級生たちが当時のままで、（会っていないので見た目はわかりませんが……）心の中がじわ～っと何ともいえない懐かしさと暖かさで一杯になったことです。少女時代の一四年（サレジオ幼稚園より）を一緒に過ごした幼なじみとの会話は本当に心が暖まった思いです。今日こうして思い出を書く機会をいただけたのも、ひとえに同期の友人たちが、日本を飛び出して行ったきりだった私に会報を送り続けてくれたお陰です。心から感謝しています。そして、あらためて私のルーツは日黒星美学園にあったということを実感しています。

私はこれからもずっと、アンジョリーナ・バローネ校長様を初め日黒星美の先生方、先輩方、

同級生たちを心の支えにこの国で頑張っていこうと思います。最後にこの場をお借りして皆様にお礼申し上げます。本当にありがとうございます。私も目黒星美学園ファミリーの皆様の為にお祈りしております。